

特集

くじらのまち鮎川

～近代捕鯨100周年～



鮎川港

中央右はおしかホエールランドの捕鯨展示船「第十六利丸」、手前には出航を待つ2隻の捕鯨船

鮎川は、近代捕鯨が始まって100年を迎えます。昭和30年代前半の捕獲数をピークに捕鯨の歴史を刻みながら、全国有数の「くじらのまち」として知られてきました。

捕鯨の歴史は9世紀までさかのぼるといわれ、捕鯨技術の進歩とともに、鯨の食文化が発展してきました。

今回の特集では、日本の近代捕鯨開幕のきっかけになった「くじらのまち」鮎川の「捕鯨の歴史」を紹介します。

国内随一の近代捕鯨基地

鮎川の捕鯨の歴史は、網捕り式捕鯨が試みられた江戸時代末期までさかのぼります。その後、ノルウエー式捕鯨が導入された近代捕鯨の時代になり、沿岸捕鯨基地が鮎川に完成（1906年）したことによって本格的に発展しました。

当時、国内には大小合わせて12社の捕鯨会社があり、日本海や高知県、和歌山県などの沿岸で操業していました。まもなく世界三大漁場である三陸沖へ各社が進出し、漁場に近い鮎川周辺に9社の捕鯨会社が集結して国内随一の近代捕鯨基地として繁栄してきました。

漁業を営む生活を送っていた鮎川の人々は、捕鯨会社の進出などで収入の安定した雇用労働者へ職を変えていきました。鯨肉を専門に取り扱う会社、

捕鯨船に補給をする会社や肥料会社など、鯨に関わる産業はめざましい発展を遂げ、隆盛を極めました。

※ノルウエー式捕鯨

汽船に搭載した砲から綱のついた鈎を発射して鯨を捕獲する漁法

ユニークな税「鯨税」

旧鮎川町時代には、鮎川に水揚げされる鯨に対して県民税と附加税を課税するユニークな税がありました。この「鯨税」は、大正時代から昭和25年まで施行され、町の財政は充実し町民税の軽減が図られました。

商業捕鯨から調査捕鯨へ

日本では、国際捕鯨委員会（IWC）の規制により、昭和62年（1987年）に南氷洋での商業捕鯨を一時停止しま

した。その後、鯨の資源量などを調査するための調査捕鯨が行われるようになり、平成14年からは、日本沿岸域での捕獲調査が行われ、三陸沖では鮎川港を基地として調査が行われています。

この調査により、日本周辺には多くの鯨が生息していることが分かってきました。また、胃の内容物調査では、鯨が魚などの水産資源を大量に捕食していることがわかり、鯨の捕食が漁業に与える影響についても調べられています。

百年記念イベント

明治39年（1906年）、鮎川浜で



▲ 鮎川沿岸沖合で捕鯨準備をする砲手（昭和56年）



▲ ナガス鯨の陸揚げ（昭和37年ころ）



▲ 鮎川港（昭和25年ころ）

初めて近代捕鯨が開始されてから今年で100年を迎えました。

7月9日(日)、多くの皆さんに、捕鯨基地としての歴史や鯨食文化を知ってもらおうと、鮎川近代捕鯨100周年記念イベントが、おしかホールランドおよび前広場で開催されました。

イベントでは、近代捕鯨のパネル展により地域と捕鯨のつながりを紹介しながら、鯨肉の焼肉、くじら汁などの試食会を開き、鯨食文化の啓蒙を図りました。当日は、鯨肉販売コーナーが設けられ、用意された2,000個（1個約500グラム・1,000円）が飛ぶように売れていました。

捕鯨の技術や文化を伝承

(有)戸羽捕鯨第七十五幸栄丸の北澤豊さんは、捕鯨に携わって37年、捕鯨船で花形職の砲手を務めて5年目になります。今は、IWCの規制によって商業捕鯨が一時停止されていますが、昭和60年代まで沿岸捕鯨を中心に操業し、多い時で年間40頭から60頭以上の鯨を捕獲していました。

現在は調査捕鯨などで捕獲量は減りましたが、捕鯨の歴史や鯨の食文化は、携わる漁師さんによって、長年にわたって伝承されています。

北澤さんの最近の漁は、金華山から南東110キロメートルから南の160キロメートルが漁場で、ツチ鯨を捕っています。漁場では鯨を探すことから始まり、鯨を発見すると船の指揮権は北澤さんになります。



IWC国際捕鯨委員会報告会

7月9日(日)、おしかホールランド前広場を会場に行われた捕鯨100年祭において、第58回IWC国際捕鯨委員会年次会合の結果報告会が行われました。

日本捕鯨協会長をはじめ、水産庁、日本鯨類研究所から今後の捕獲調査など、各分野での報告がありました。

参加者からは、商業捕鯨の今後の動向などについて熱心な質疑が行われていました。



捕鯨船砲手 北澤 豊さん

「動いているので難しいね。浮き沈みを繰り返すのでタイミングを計りながら、45メートル程の射程距離になるまで追いかけるときにドキドキするね」と語っていました。